

## 新たな時代の授業研究のあり方（答申） 概要

新たな時代の授業研究のあり方研究委員会

### 1 答申作成の趣旨

新学習指導要領が小中学校で完全実施となった。新しい学習指導要領では各教科の目標も「見方・考え方を養う」から、「資質・能力を育成する」に改定され、学習過程も「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められている。目指すべきゴールとそこに向かう方策の変更だけでなく、多忙化する学校や教職員の「働き方改革」の推進、学校規模の変化等、学校や教職員を取り巻く環境が大きく変わってきている。

「子どもを中心とした教育」を求めていくことは、私たち長野県の教職員にとって基盤であり、それは不易なものである。また、「授業を通して子どもを育てること」も不易であり、そのための授業研究は学校づくりの基盤であると考え。求めるものは変わらないが、取り巻く環境が変化している「新たな時代」の中、私たちは授業研究をどう活性化していけばいいのか、再考していく必要がある。

本答申は、そんな立場から今までの私たちの授業研究で大切にしてきたもの、課題、解決の方向を提言させていただいた。各学校が学校の特長を生かした授業研究のあり方を考えていただく参考になればと願っている。

### 2 これまでの授業研究の現状と課題

学制施行以来、長野県では「目の前にいる子どもたちにどんな力をつけるのか」について授業を通して討論し、求めるものに近づけようと研究を累積してきた。その意味において授業研究は、子どもの姿を通じた教育への挑戦の歴史であり、その挑戦を互いに磨き合った歴史ともとらえられる。

近年、その目的が曖昧となり、「仮説を立て実証する」行程が授業研究のように意識され、授業研究そのものが形骸化してきている部分はないだろうか。授業研究を行ってもそれが「自分の授業に生かせない」「研究授業を終えた後に成果を生かせない」、そんな思いが、負担感を感じさせ、授業研究そのものが教師の生活を圧迫しているかのような思いを抱かせているのではないだろうか。

ここでは、これまでの授業研究の歴史と現状を問い返し、新たな時代の授業研究として考えていきたい課題を以下の4点に絞った。

- ①授業研究の目的・目標、あり方等の共有
- ②校種の特性を生かした授業研究
- ③授業研究会のあり方
- ④働き方改革と授業研究

### 3 今後の授業研究の視点

課題に対して、解決の視点を以下の点から示した。

#### (1) 授業研究の目的・目標、あり方等の共有

「なぜ授業研究をするのか」その目的が共有されないままに授業研究が行われていないだろうか。授業研究をすることが目的なのではなく、目的を達成させるための手段として授業研究を位置付ける必要があり、それを共有することが重要である

と考えた。授業研究の目的を明確にするための視点として、次の3点を設定した。

①組織開発の視点（学校づくりとしての授業研究）

②子ども育成の視点（子どもを主語にした授業研究）

③教師育成の視点（教師が伸びる授業研究）

#### (2) 校種の特性を生かした授業研究

校種によって、教師が語る子どもの姿は異なり、こんな授業にしたいと願う授業像も異なる。校種の特性を踏まえ、教師が自分の授業に対する「問い」をもち、その「問い」を同僚と協働して追究することが校種の特性を生かすことにつながる。また、異校種間で協力して取り組むことも重要であると考え、「問いをもつ視点」と「異校種との連携の視点」を設定した。

#### (3) 授業研究会のあり方

完成したものを批評し合う授業研究会や感想発表で終始する授業研究会から、互いの素朴な感動から、そこに共通する教師の働きかけや子どもの学びの変化に気づき、「問い」が生まれ、アプローチの工夫が考え合える授業研究会を目指したい。そのために授業研究会に向かう意識を「参観者」と「授業者」の視点で設定した。

#### (4) 働き方改革と授業研究

仲間とともに一つの授業を構想し、練り上げる楽しさは教師の授業力を向上させるエネルギーとなる。働き方改革の推進の中、限られた時間を活用して、各学校が、学校の状況や教師の意識、授業で工夫している点、強み等を加味し、その学校に適する授業研究を考えていくことが大切である。また、その時間を生み出していくことが必要であると考え、「学校の自律性、教員の主体性の視点」と「時間を生み出す視点」を設定した。

### 4 新たな時代の授業研究に向けた取組

授業研究が学校運営の柱となり、「授業を通して子どもを育てる」ことは、教師なら誰しもが思うところである。しかし、現状は「授業研究」そのものが「教師を忙しくする」元凶のようにとらえられ、声高にそれを語れないこともあるのではないか。

本来目の前にいる子どもたちにこんな力をつけたい、こんな学びをさせたいと願い、様々な教育活動を行い、授業実践を行うことは私たちが取り組んできたことであり、そこに喜びを感じてきた。しかし、授業研究がいつしか「仮説を実証する」ための道具となり、その道具の良し悪しを討論することが授業研究会となってしまっていないか。子どもの学ぶ姿の感動を語る授業研究から、子どもの学ぶ姿に良し悪しをつける授業研究へと変化してきてしまったのではないか。

授業研究を本来の「この子たちをこんな子どもに育てていきたい」という私たちの挑戦の累積に変えていくためにできそうな取組を提言した。